

最優秀賞

高橋 達也（宮城県東松島市）

『僕も泳ぎたい！』



東日本大震災で亡くなった子供たちへの鎮魂と地域の復興を願って、毎年5月、東松島の空に沢山の青い鯉のぼりが泳ぎます。未来を担う子供たちの成長と幸せを願ってシャッターをきりました。

（撮影：宮城県東松島市／令和5年5月4日）

優秀賞

川村 裕信（宮城県仙台市）

『田園地帯』



自衛隊ヘリコプター体験搭乗に参加、霞目を飛び立ち田園地帯上空を飛行しました。自動車道を境にして都市と田園が見事に分かれておりました。また自動車道の津波防潮堤としての役割が大きかったことがわかります。

（撮影：仙台市宮城野区霞目上空／令和5年3月20日）

『あの日の事』

守屋 正安（宮城県仙台市）



波消しブロックを超えた大津波が幾人もの命を奪った。夏休みの登校日、幼き頃に一緒に遊んだ友を思い、仲良し三人組が「友との思い出」を忘れないように会いに来たのかもしれない…。

（撮影：仙台市荒浜／令和5年8月22日）

佳作

瀬川 征吉（青森県八戸市）

『人間の絆』



開通した復興道路を使って岩手県三陸沿岸・田老の防災施設見学。高さ10m余りの防潮堤で、現地のガイドの案内を受ける。説明地点に黙々と上る人々に感動を受け、思わず写した一枚。人間の絆は、未来永劫に続く。

（撮影：岩手県宮古市）

西山 栄（福島県いわき市）

『野馬懸の御小人たち』



相馬地方の伝統行事「相馬野馬追い」の最終日に行われる「野馬懸」で裸馬を捕らえるため、素手で追ひ込みます。東日本大震災も困難を乗り越え実施していますが最近の温暖化による暑さには馬も人も耐え切れず令和6年は7月から5月に繰り上げて行われるそうです。

（撮影：相馬小高神社／令和5年7月31日）

渡邊 成一（宮城県名取市）

『関上の朝』



海拔7.2mに盛土された河川防災ステーション駐車場の初冬の朝。整地された土地の手前は墓地。先には朝陽に照らされた新しい住宅が拡がり、遠くには今も変わらずに蔵王の山並みが見守ってくれます。

（撮影：名取市関上東一丁目地内／令和5年12月3日）

岸 浩子（岩手県陸前高田市）

『復興の船出』



震災の時、陸前高田は人々、町、海…言葉に語り尽くせぬ程の被災でした。松原も同様、その側の漁港漁業も同様でした。漁業者の多くの迷いと決断の元、養殖も再開されました。海の神様に大漁祈願の秋祭りの朝でした。

（撮影：陸前高田市米崎町／令和5年10月28日）

佐々木 均（宮城県多賀城市）

『新しい年迎える』



新しい年を迎える東松島市野蒜海岸。私自身も元気に過ごせるように祈りました。

（撮影：東松島市野蒜海岸／令和5年1月1日）

村上 美保子（福島県新地町）

『月の道』



海の上に月の道が現れた。この道の先は補陀落まで続いているのだろうか。もしそうなら、今から舟をこぎ出そう。どうしても会いたい人がそこにいる。

（撮影：新地町釣師浜／令和5年9月29日）

村上 淳（宮城県気仙沼市）

『仲良し家族』



あの日、大津波が押し寄せた。気仙沼に穏やかな日常が戻ってきました。今日は仲良し家族で岩井崎の潮吹き見物です。このような光景がずっと続くと良いなと強く心のそこから感じる今日この頃です。

（撮影：気仙沼市岩井崎／令和4年7月31日）

藤島 純七（宮城県仙台市）

『伝統の舞』



大震災で被災した南三陸町の人谷地区で催された「入谷打囃子」。約270年続く伝統芸能。3年ぶりに復活。被災した町民の心をいやした。

（撮影：南三陸町入谷地区／令和5年9月17日）

佐藤 広和（宮城県仙台市）

『未だ高線量地帯の津島浪江町』



復興拠点津島は1.5km除染している。除染しても0.5μSvで年間線量は1mmSv(0.23μSv以下)にならない。会議室に入る前、靴に放射能が付かないように靴用の保護キャップを履いて入っていく。11年たつてなお…。

（撮影：福島県浪江町津島／令和4年4月15日）

柏館 健（福島県いわき市）

『今日はみんなでミカン刈り』



海の見える広野町のミカンの丘には、十二月になると多くの園児が来て、ミカン刈りを行っています。今年も遠足気分がたくさんの子供達が笑顔でミカンの収穫をしました。海への何の不安もなく、海を眺めながらミカン刈り、いいですね。

（撮影：福島県広野町／令和5年12月7日）

＜第9回東北お遍路写真コンテスト作品募集！＞

■募集テーマ：風景・人物・祭りなど、東北お遍路に因む写真

■応募方法：写真は2Lサイズのプリントで、コメント(100字以内)と一緒に送ってください。写真とコメントで審査します

■応募期間：2024年12月10日(必着)

▶作品の送り先：〒976-0022 福島県相馬市尾浜字南ノ入 241-3 東北お遍路コンテスト係

青柳 健二（写真家）



渡辺 祥子（フリーアナウンサー、情報誌「りらく」編集長）



今回も、先に応募作品のコメントを読み、後で写真を見るという審査方法になった。想像と違っていたり、なるほどと思わせたり、作品を期待させるコメントが多かった。最優秀賞を受賞した「僕も泳ぎたい！」は、青い鯉のぼりをバックにした子どもの姿で、撮影意図がはっきりしている。表情もいい。明るい未来を願うお父さんの気持ちもよくわかる。優秀賞の「田園地帯」は、ヘリからの撮影で住宅街と田園がみごとに分かれているのが一目瞭然だ。これこそ写真の力というものだろう。もう一点の「あの日の事」は、穏やかな雰囲気の中にも緊張感を感じるの、海辺で戯れる女子学生と波消しブロックの荒々しい形が対照的だからだろうか。海の二面性を感じた。

写真一枚一枚、コメント一言一言に、13年の時の積み重ねが確実にあったことを、改めて実感した。笑顔弾ける写真、静かな時の流れを感じさせる写真、躍動感ある情景など。中にはあの時から時間が止まってしまった苦しみを表現するものもあったが、全ての写真に撮影者の願いや祈りが込められていると感じた。ところで、このコンテストの妙は写真とコメントの相乗効果と聞いた。インパクトのある写真がある一方、「写真に添えた言葉ではなく「言葉に添えた写真」かといえるほど、言葉が写真に意味を持たせ、その世界を大きく広げるタイトルやコメントもあった。そうした、想いにダイレクトにふれられるのもまた、このコンテストの良さではないか。ぜひより多くの方々と共有したい。